

箸さばきに関する意識と実測の一事例

富岡 孝・岩崎律子・桜井昌子・君羅 満^{*}

The Consciousness on Handling Chopsticks, and a Practical Examination

TAKASHI TOMIOKA, RITSUKO IWASAKI, MASAKO SAKURAI and MITSURU KIMIRA^{*}

箸はわが国の伝統的な食事道具の一つであるが、近年、若者の箸使いに対する警鐘の声があがり、もはや箸さばきの復活を叫んでも間に合わない時代に到達したといわれている。

こうした世情の背景をみると、そのゆえんとして食事様式の変化、食品の多様化が存在することは論をまたないが、これに加え、そのことを助長する遠因には家庭におけるしつけのゆるみが考えられ、また、親自体正しい箸の持ち方、使い方を知らない世代が漸増し、子供に正しい教育がなされていないことも関連しているとの指摘がある。

以上のような実情に鑑み、前回、筆者ら¹⁾は女子学生を対象に箸さばきと摂食行動との関わりを意識調査の面から検討したところ、食事様式の多様化、個別化が現れており、そうした中で食事づくりや手伝いをする者が多い傾向がみられた。しかし、箸さばきについては下手だと答えている者が60%以上を占め、かつ箸の正しい持ち方、使い方を身につける必要性を感じている者があまた存在することが確認された。

そこで、今回は実際の箸の持ち方、さばき方を実測によって看取した場合、その実態は如何なる様相を呈するのかを探ることを目的とし、前回同様女子学生を対象（前回の対象集団ではないが）として割り箸および塗り箸

を使い、乾燥大豆を材料に箸さばきの実測を試みた。併せて、同一対象に箸さばきに関する極めて簡単な質問紙調査（前回の意識調査に用いた一部の質問事項に若干の新しい事項を加えた）を実施した。

本稿は、その結果得られたいくつかの情報をとりまとめたものである。

方 法

1. 対象者および実施方法

本学食物栄養専攻1年次の学生141名を対象とし、昭和62年10月から12月にかけて、筆者らが担当している給食管理実習の授業の中で実施した。

箸さばきの実測は1回6～8名程度、延べ18回にわたって行ない、質問紙調査は実測の終わった12月上旬に一斉に行った。

被験者の箸さばきに関する意識と実測の結果とにどのような関わりが存在するかを探ることも考慮し、両者とも受験した者に限定した結果（欠席や中途退学などによっていずれか一方しか受けなかったものを除いた）、127名分の資料を得た。しかし、うち1名は手指に傷害を受けており、通常の箸さばきとは認めがたい状態であったため、この1名分を資料から除外し、126名分を分析資料に用いた。

* 東京農業大学栄養学科

キーワード：①箸、②割り箸、③塗り箸、④箸さばき

2. 材料と用具および実測方法

実測の材料には市販の乾燥大豆（1粒0.36～0.5g，9×7mm程度）を用い，用具は割り箸（長さ20.5cm，4×5mm程度）と塗り箸（長さ22cm，持ち代6×6mm，使い代3×3mm程度）を使用した。

実測は集団給食試食室において，試食用テーブルの上に器に盛った乾燥大豆（1器240～250g，660～700粒程度）およびとり皿と箸をおき，被験者が腰かけて食事をする姿勢と同様な状態を設定（今回は3～4人の家族が一つの器に盛った料理をつまむ状況を想定）した。

被験者は測定者の「スタート」の声を合図に箸さばきを開始し，器に盛った大豆粒をとり皿に移す操作を行い，この操作を1分間続行し（ストップウォッチによって計測），その間に器からとり皿に移した各被験者の大豆の個数を測定した。この実験は割り箸の場合を先に，塗り箸の場合を後に行った。

なお，この実験の際，被験者には箸の持ち方などについての解説は一切行わず，各自の平生の箸さばきを看取することとし，測定者

が実験の最中に各自の箸の持ち方の良し悪しを観察チェックした。こうしたチェックは，限られた時間と測定者の主観によって判断したものであり，厳密さに欠けることは否めないことも念のため付記しておく。

3. 質問紙調査の内容

内容は表3の調査票に示すとおりである。

4. 分析方法

まず，割り箸，塗り箸各々の測定個数の度数分布，平均，標準偏差，両者の測定個数の差などを算出し，さらに，両者の関わり具合をみるため，相関，回帰なども求め，比較検討した。

次に，質問紙調査は質問項目ごとの分布およびクロス分布を求めた。また，質問分布と実測分布との関わりをみるため，両者のクロス集計を試み， χ^2 値，関連係数などを算出し，意識と実測との関わりを検討した。

結果と考察

1. 実測による大豆粒の測定値分布（図1. 表1）

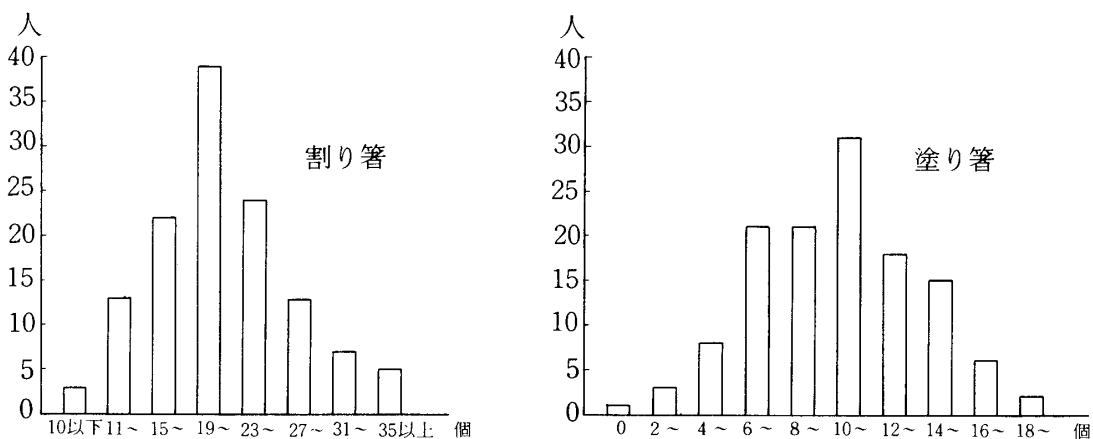


図 1. 割り箸および塗り箸の測定値度数分布

表 1. 割り箸および塗り箸による大豆粒の測定値

(N = 126)

	平均値	標準偏差	変動係数	相関係数	回帰式
割り箸	22.6 (10~44)	6.46	28.6%	0.273*	y = 0.156x + 6.566
塗り箸	10.0 (0~18)	3.63	36.3%		

() 内は範囲

* P < 0.05

割り箸による箸さばきにおいては、最小が10個、最大は44個拾い移した者がおり、平均22.6個であった。塗り箸の場合は最小が0個、最大の者でも18個、平均10.0個であり、両者の違いが如実に表われている。

両者の測定値分布は、ほぼ正規型であり、平均値でみる限り2倍以上の格差が認められ、塗り箸の成績は割り箸に比べかなり劣り、変動係数からみても箸さばき成績のバラツキ度がより大きい。

このことは、箸の材質や形状の特徴の一端を示すもので、被験材料と箸との摩擦の関わり、あるいは手指と箸との摩擦の関わりといった物理的な相違を示唆するものと考えられる。とくに、今回は実測材料に乾燥大豆を用いており、この点が実験成績に大きく影響しているものと推測される。

ところで、割り箸の成績と塗り箸のそれとの相関係数をみると、統計学的には有意であり、割り箸の成績がよい者は塗り箸の成績もよいとの判断が下せるのであるが、説明変数が7.5%程度であり、そうした結論は下しにくいことも否めない。準じて、回帰も推定によさを必ずしも表わしているとは言いがたく、両者の測定値の差もかなりバラツキがあるものと推定できる。

2. 観察による箸の持ち方の正否別の測定値分布 (表2)

被験者の箸の持ち方の正否を観察(口ばし型を正しい持ち方とした)し、3群(正しい、判別しにくい、間違っている)に分けた場合

の測定値分布をみると、塗り箸においては3群に有意の差はみられなかったが、割り箸の場合は持ち方の間違っている群が正しい、判別しにくい群に比べ有意に成績が低かった。また、塗り箸の場合、間違っている群ではその他の群に比べ変動係数が大きく、成績のバラツキが大きい結果を示した。

しかも、概して箸の持ち方の正しい群は、その他の群に比し、割り箸、塗り箸ともに変動係数が小さい傾向がみられた。

以上のことから、箸の持ち方の正否が測定成績を左右する事実をうかがわせ、操作しにくい塗り箸では、成績の差こそ有意でないが、持ち方の間違っている群は成績に極端なバラツキがでてくるものと解釈される。

日本人の箸の持ち方¹⁾は正常型(口ばし型)、非正常型(平行型など5種類)を含め6種類に分類されるといわれているが、正常型(正しい持ち方)が機能的にも優れ、箸を上手に使う基本は箸を正しく持つことが肝要となる。

今回の観察の結果では、26.2%の者(33名)が正常型とみなせるが、あとの73.8%の者は非正常型に入るものと思われ、箸の正しい持ち方の教育が是非とも必要なのではないかと思料される。

3. 質問項目に対する解答分布 (表3,表4)

1) 箸の持ち方、さばき方の上手、下手の意識について

箸の持ち方が正しく、箸さばきが上手と答えた者は126名中30名(23.8%)おり、持ち方も悪く、箸さばきが下手だと答えた者が13

表2. 観察による箸の持ち方の正否別の測定値

	割り箸	塗り箸
正しい (N=33)	24.1±4.90 (20.3%)	10.2±3.18 (31.2%)
判別しにくい (N=68)	23.2±7.04 (30.3%)	10.2±3.43 (33.6%)
間違っている (N=25)	19.2±5.31 (27.7%) [*]	9.3±4.52 (48.7%)

* P<0.05 ()内は変動係数

表 3. 質問紙調査の内容

箸使用に関するミニアンケート			
	クラス	番号	氏名
次にあげる質問事項に答えて下さい。(解答は該当項目に○印をつけて下さい。)			
1. あなたは、現在、箸の持ち方が正しく、箸さばきが上手だと思いますか。それとも箸の持ち方がまちがっていて下手だと思いますか。			
(1) 箸の持ち方が正しく、箸さばきが上手			
(2) 箸の持ち方はまちがっているが、箸さばきはまあまあ			
(3) 箸の持ち方は正しいが、箸さばきが下手			
(4) 箸の持ち方が間違っているのに、箸さばきが下手			
2. あなたのお父さんやお母さんの箸の持ち方、使い方は上手(正しい)だと思いますか。			
(1) 上手だと思う	(2) 下手な方だと思う		
3. あなたは、スプーン、フォーク(ナイフと併用の場合も含む)を使って食事をすることが多い方ですか。少ない方ですか。			
(1) 多い方	(2) 少ない方		
4. あなたは、料理や食事づくりをした時、箸の使い方で困った経験がありますか。			
(1) ない	(2) ある		
5. あなたは、箸の持ち方、使い方が悪いという指摘をうけたことがありますか。			
(1) ない	(2) ある		
	ある場合は誰から		
	()		

表 4. 箸さばきの質問に対する解答分布

(N=126)

1. (1) 箸の持ち方が正しく、箸さばきが上手	30名 (23.8%)
(2) 箸の持ち方はまちがっているが、箸さばきはまあまあ	21 (16.7)
(3) 箸の持ち方は正しいが、箸さばきが下手	62 (49.2)
(4) 箸の持ち方が間違っているのに、箸さばきが下手	13 (10.3)
2. (1) 親の箸の持ち方、使い方は上手(正しい)と思う	118 (93.7)
(2) " " 下手な方だと思う	8 (6.3)
3. (1) スプーン、フォーク(ナイフと併用)を使って食事をすることが多い方	16 (12.7)
(2) " " " " 少ない方	110 (87.3)
4. (1) 料理や食事づくりをした時、箸の使い方で困った経験がない	99 (78.6)
(2) " " " " ある	27 (21.4)
5. (1) 箸の持ち方、使い方が悪いという指摘をうけたことがない	77 (61.1)
(2) " " " " ある	49 (38.9)
	(両 親 19 (38.8)
	母 15 (30.6)
	友人 7 (14.3)
	(内訳) その他 4 (8.2)
	父 2 (4.1)
	祖母 1 (2.0)
	未記入 1 (2.0)

名 (10.3%) みられた。表4の1の(1)~(4)の項目について(1), (2)を箸さばきは上手な方, (3), (4)を箸さばきは下手な方という見方をすれば, 上手な方が51名 (40.5%), 下手な方が75名 (59.5%) であり, このことは, 先回の調査と類似した結果が認められ, 昨今の女子学生の箸さばきに対する意識傾向を示しているものと推測される。しかし, 箸さばきの観察 (実測中の) の結果と照し合わせてみると, 箸さばきの実際と各自の意識には隔たりがみられるようである (表5)。観察によって箸の持ち方が間違っているとみなした者の中にも, 自分は正しいと信じている者が若干ながら看取され, 箸の正しい持ち方を知らない者が存在していることをうかがわせている。

2) 親の箸の持ち方, 使い方に対する意識

親の箸の持ち方, 使い方は, 大半の者が上手 (正しい) と思っており, 僅かではあるが, 下手だと思っている者もいる。

わが国における箸の持ち方, さばき方をみると, 40代後半以降の人達は合格率が高く, 年代が若くなるにつれ落ち続けるという報道がある⁵⁾。この情報からすれば, 被験者らの親の年齢は概略合格率の高い部類に属すると思われ, 本来なら被験者らのモデルになれるケースであるが, しつけのゆるみも手伝ってか, 被験者らの箸さばきは今回の結果からみて到底親の比ではないことも明らかだ。

3) スプーン, フォークの使用頻度の意識

スプーン, フォークの使用頻度が多いと答えた者は約13%いるが, 大半はそれを使うことが少ないと答えており, 圧倒的に箸を使う

機会が多いことを示している。

日本人の食生活においては, 箸は個人に所属するものであり²⁾, 自分専用の箸を使い, 家族同志であっても他人の箸を使うことは滅多にない。その点, スプーンやフォーク, ナイフは自分専用ということは少ない。

しかし, スプーンやフォーク, ナイフを使う場合にもマナーがあるように, 箸使いにもマナーが存在する。箸の世話になる機会が多い日本人は, 箸使いにももう少し目を向ける必要があり, 学校給食の先割れスプーンはマナーの習得には役に立たず, 逆に日本の食事文化の瓦解を促しているとの指摘がある³⁾。

4) 箸使いで困った経験の有無

料理や食事づくりをした時, 箸の使い方で困った経験のない者が78.6%, ある者が21.4%で, 困った経験のない者は, 先回の調査結果 (46.3%) よりもかなり多い (ただし, 先回は「少しはあった」というカテゴリーを設けてあるので断言しにくい)。

このことは, 食生活の多様化, 簡便化, 個別化の顕在とはうらはらに, 箸使いに対する意識が潜在化しているものと考えられる。

5) 箸さばきについての指摘の有無

箸の持ち方, 使い方が間違っているという指摘を受けたことがない者は61.1%, ある者は38.9%と先回の調査結果 (ない者21.5%, ある者78.5%) とは大幅に異なり, 逆転している。指摘者は先回同様, 親が大半を占めているが, 今回の結果からみると, 指摘を受けたことがない者は, 箸の持ち方, 使い方が必ずしもよいわけではない (表10参照)。つま

表5. 観察による箸の持ち方の正否と意識面の相違

	観察結果	よい	間違っている
(1) 箸の持ち方が正しく, 箸さばきが上手	9名	2名	
(2) 箸の持ち方はまちがっているが, 箸さばきはまあまあ	3名	11名	
(3) 箸の持ち方は正しいが, 箸さばきは下手	20名	6名	
(4) 箸の持ち方が間違っているため, 箸さばきは下手	1名	6名	
	計	33名	25名

り、食事の場における箸使いに対するしつけのゆるみは否定できず、そこには、現代の社会背景を反映した複雑な要因が介在するものと推測される。

4. 実測および質問分布のクロスによる情報の検索

両分布の各種項目についてクロス集計（2×2表）を試み、関連ありや否やを χ^2 -検定（ $P=0.05$ ）により検出し、両分布の関連度合（関連係数）も算出した。

ここでは、関連性ありと判断できたもののみを取り上げ、箸さばきの特徴を拾い出してみた。

1) 割り箸と塗り箸との測定値の差と割り箸の測定値との関連（表6）

割り箸の成績がよい者ほど、割り箸と塗り箸の差が大きく、割り箸の成績が低い者ほど、

両者の差が小さい。

つまり、割り箸なら成績を上げることができる者でも、塗り箸の場合は簡単に成績を上げることは難しいことを意味している。前述のように、箸の材質や形状が成績に影響を与えるわけで、とくに摩擦の小さい塗り箸は、箸さばきに手間どることが予測される。

2) 割り箸と塗り箸との測定値の差と塗り箸の測定値との関連（表7）

両者の成績の変動幅（差）が大きい者は、塗り箸の成績が劣る傾向にあり、変動幅が小さい者は、塗り箸の成績がよい傾向にある。すなわち、箸さばきの安定している者は、箸の材質や形状によって成績が極端に左右されないことを示唆している。

3) スプーン・フォークの使用度合と箸の持ち方、使い方の指摘有無の関連（表8）
スプーン・フォークの使用頻度の高い者は、

表6. 割り箸と塗り箸との測定値の差の違い(大小)と割り箸の測定値の大小とのクロス分布

	割り箸と塗り箸との差が 10個未満の者		割り箸と塗り箸との差が 15個以上の者		計
割り箸の測定値が 20個未満の者	31	(82%)	7	(18%)	38名
割り箸の測定値が 25個以上の者	7	(15%)	40	(85%)	47名
計	38	(45%)	47	(55%)	85名

$\chi^2 = 35.149$ ($P < 0.05$), 関連係数 = 0.643

表7. 割り箸と塗り箸との測定値の差の違い(大小)と塗り箸の測定値の大小とのクロス分布

	割り箸と塗り箸との差が 10個未満の者		割り箸と塗り箸との差が 15個以上の者		計
塗り箸の測定値が 9個未満の者	8	(22%)	29	(78%)	37名
塗り箸の測定値が 12個以上の者	30	(63%)	18	(37%)	48名
計	38	(45%)	47	(55%)	85名

$\chi^2 = 12.519$ ($P < 0.05$), 関連係数 = 0.384

表8. スプーン、フォークの使用度合と箸の持ち方、使い方の指摘有無のクロス分布

	箸の持ち方、使い方について 指摘を受けたことがある者		箸の持ち方、使い方について 指摘を受けたことがない者		計
	人数	割合	人数	割合	
スプーンやフォークを使って 食事をすることが多い者	12	(75%)	4	(25%)	16名
スプーンやフォークを使って 食事をすることが少ない者	37	(34%)	73	(66%)	110名
計	49	(39%)	77	(61%)	126名

$\chi^2 = 8.391$ (P < 0.05), 関連係数 = 0.258

表9. 箸の使い方で困った経験の有無と箸の持ち方、使い方の指摘有無とのクロス分布

	箸の持ち方、使い方について 指摘を受けたことがある者		箸の持ち方、使い方について 指摘を受けたことがない者		計
	人数	割合	人数	割合	
箸の使い方で困った 経験がある者	18	(67%)	9	(33%)	27名
箸の使い方で困った 経験がない者	31	(31%)	68	(69%)	99名
計	49	(39%)	77	(61%)	126名

$\chi^2 = 9.719$ (P < 0.05), 関連係数 = 0.278

箸の持ち方、使い方について指摘を受けたことがある者に多く、逆に、指摘を受けたことがない者は、スプーン・フォークの使用頻度の低い者が多い傾向にある。

これは、箸の持ち方、使い方がよくないと言われるために、自然にスプーンやフォークを使う機会が多くなるのか、あるいは食事内容がスプーンやフォークを使うものが多いのか、その予測はつかないが、若者の箸ばなれの一部をのぞかず事実とも考えられる。

4) 箸の使い方で困った経験の有無と箸の持ち方、使い方の指摘有無の関連 (表9)

箸の使い方で困った経験がある者は、箸の持ち方、使い方について指摘を受けたことがある者に多く、困った経験のない者は、箸使

いの指摘を受けたことがない者に多いことを示している。

料理や食事づくりで、箸の使い方がうまくいかないため、失敗や不手際を生ずることはままある。そうした際の指摘は、箸の持ち方にも注意を払うことになり、次に述べる観察による箸の持ち方のよい者は、箸使いについて指摘を受けた者が多いという結果にもつながるものと考えられる。

5) 観察による箸の持ち方の正否と箸の持ち方、使い方の指摘有無の関連 (表10)

箸の持ち方、使い方について指摘を受けた者は、箸の持ち方の正しい者が多く、反対に、指摘を受けたことのない者は、箸の持ち方が間違っている者が多かった。

一般には、指摘（前述のように親が多い）を受ければ、箸の持ち方にも気配りするであろうし、正しい持ち方を実行するようになるであろう。一方、指摘を受けたことのない者は、間違ったままそれを引きずることになり、生涯の損ともなり得る。こうした点にもしつめのゆるみを感じられる。

6) 箸さばきの上手、下手の意識と塗り箸の測定値との関連（表11）

箸さばきが上手な方だと思っている者は、塗り箸の成績がよく、下手な方だと思っている者は、塗り箸の成績が劣る。

塗り箸の場合には、割り箸と違って箸の持ち方が正しくないと成績が上がらない。箸さばきが上手だと思っている者は、実測の結果

がそれを立証しており、この点は概ね意識と事実が一致している。

要 約

本学食物栄養専攻一年次の学生を対象とし、割り箸、塗り箸を使い、乾燥大豆を材料に箸さばきの実測を試み、併せて箸さばきに関する意識調査を実施し、126名分の資料を分析した結果、次の情報を得た。

1) 割り箸の成績は、平均値で塗り箸の2倍以上であり、塗り箸の成績がバラツキは大きかった。

2) 割り箸の成績がよい者ほど、割り箸と塗り箸との成績の差が大きく、箸の材質や形

表10. 観察による箸の持ち方の正否と箸の持ち方、使い方の指摘有無とのクロス分布

	観察による箸の持ち方の正しい者		観察による箸の持ち方が間違っている者		計
箸の持ち方、使い方について指摘を受けたことがある者	24	(75%)	8	(25%)	32 名
箸の持ち方、使い方について指摘を受けたことがない者	9	(35%)	17	(65%)	26 名
計	33	(57%)	25	(43%)	58 名

$\chi^2 = 7.964$ ($P < 0.05$), 関連係数 = 0.371

表11. 箸さばきの上手、下手の意識と塗り箸の測定値とのクロス分布

	塗り箸による測定個数が9個未満の者		塗り箸による測定個数が12個以上の者		計
箸さばきが上手な方だと思っている者	10	(29%)	25	(71%)	35 名
箸さばきが下手な方だと思っている者	35	(69%)	16	(31%)	51 名
計	45	(52%)	41	(48%)	86 名

$\chi^2 = 11.792$ ($P < 0.05$), 関連係数 = 0.370

状が成績に影響を与えている。

3) 観察の結果、正常型(正しい)の箸の持ち方をしている者が26.2%、73.8%の者が非正常型であった。

4) 意識面では、箸さばきが上手だと思っている者が23.8%あったが、それらの者は塗り箸の成績がよい傾向がみられた。

5) 箸よりもスプーンやフォークの使用頻度が高い者が13%みられたが、それらは箸さばきについて指摘を受けた者が多かった。

6) 箸さばきについて指摘を受けた者は38.9%おり、指摘を受けた者は、箸の使い方で困った経験もあるが、箸の持ち方は正しい者が多かった。

終りに臨み、本稿をまとめるにあたってご

助言をいただいた東京農業大学赤羽正之教授に謝意を表します。

文 献

- 1) 本多總一郎：箸の本，日本実業出版社（東京），p 130（1985）.
- 2) 加藤秀俊：食の社会学，文芸春秋社（東京），p 277（1979）.
- 3) 桂広介編：児童心理**38**，76（1984），金子書房（東京）.
- 4) 富岡孝，桜井昌子，岩崎律子：聖徳栄養短期大学紀要**17**，45（1986）.
- 5) 読売新聞：1986年4月13日，日曜版第4面.